

が述べられている。また「認知行動療法」では、自閉スペクトラム症の中核症状改善およびソーシャルスキルの向上、注意欠如・多動症の中核症状改善、併存疾患の改善、および自閉スペクトラム症の特性理解を目的とした、それぞれの認知行動療法が概説されている。そして、最後に神経発達症に対する認知行動療法の限界と今後の展望が述べられている。

最後に「支援」についての記載に關して。発達障がい者の「支援の基本」は発達障がいがありながら、日常生活を適応的に過ごせるようにすることである。ここでは、「家族支援と本人支援」の種類や、発達期から成人期の各時期での重要な支援について述べられている。家族支援としては、ペアレント・プログラムおよびペアレント・トレーニングについての内容や効果が述べられている。本人支援としては、発達期における「幼保小連携」の現状と課題を取り上げている。また、「社会性の支援」として、発達年齢（幼少期・児童期・青年期・成人期）に応じた、社会的コミュニケーションおよび

相互関係における障害に対する支援やプログラムについて書かれている。最後に「地域生活支援」について触れられており、学齢期、思春期における地域支援資源と適切なサポートについて紹介されている。一方、親が高齢になる成人期での支援が減っている現状が今後の課題として挙げられている。

これまで述べてきたように、本書を読めば、発達障がいの病態・原因・医療・支援、および最新の研究などについての現状が包括的に理解できる。またそれだけでなく、それぞれの分野での課題や克服しなければならぬ点も挙げられている。発達障がいに関して学んでいる学生・院生および研究者には特にお勧めしたい書籍である。この書籍等で学んだ知識をもとに、それぞれの分野で活躍していただき、現在の課題が克服され、近い未来に本書がアップデートされることを期待したい。

岩田圭子

（いわた・けいこ／和歌山県立医科大学）

加藤隆弘著

『精神分析と脳科学が出会ったら』

免疫細胞が生み出す快と不快の不協和音

最近評者は脳科学関連の本を翻訳して初めて知ったことが多かったが、その中でも最大の驚きは、脳科学研究がこれまでの単体の脳のみを対象とした研究の枠組みから、二つの脳の関連を対象とする研究へと舵を切っていることであった。「関係」と「甘え」を鍵概念としてこれまで臨床を行ってきた評者にとつて、いよいよ時代は大きく変わりつつあるという予感を抱かせるものであった。

そんな評者の関心が、本書の題目『精神分析と脳科学が出会ったら』に引き寄せられた。脳科学が無意識の事象をいかに扱い、精神分析との橋渡しをしているのであろうか。そんな好奇心から、本書をすぐに手に取ってみた。先に副題を目にしていれば、すぐにわかったことであるが、内容を目にして、評者の期待はものの見事に外れた。しかし、読み

進むに連れて、著者の抱いている夢は、その先を行っている内容ではないかと思うようになった。というのも、評者が最近訳した『右脳精神療法』（岩崎学術出版社）では、右脳が無意識の機能を担っていることが、最近の神経生物学の知見を織り交ぜながら論じられ、二者関係をつなぐ「情動」の働きの重要性が強調されている。それを支える右脳の機能は、乳幼児期早期の子ども・養育者関係での情動エネルギーがニューロンの成熟過程を大きく左右するという論調であるが、本書で著者が着目しているのは、ニューロンではなく、ミトコンドリアでもなく、なんとグリア細胞の一つであるミクログリアである。評者が半世紀前の医学生時代に学んだ脳研究においては、グリア細胞などにはほとんど関心が注がれることはなく、単に脳構造の一部としての話に留まっていたので



日本評論社 2022年
2000円(税別)

はないか。しかし、著者に言わせれば、ミクログリアはニューロンの構造と機能そのものを制御するほどの働きを担っているという。大学院生時代から一貫してそこに着目して、動物実験と実験経済学で活用されているゲームを用いた心理学的実験と神経生物学的研究を積み重ねる中で、脳科学と精神分析を分子細胞レベルでつなぐものは何かを探究しているという。

そこで驚かされるのは、著者がこのような地道な基礎研究を行いながら、同時に精神分析家となり、無意識の心の働きの理解を深めながら臨床実践を継続していることである。

先に取り上げた『右脳精神療法』の著者アラン・シヨアはまさにそのような人物なのだが、まさかわが国にも同じような大志を抱いている研究基礎研究を同時に遂行している研究者が実在するとは想像さえできな

った。大変な驚きであるとともに、とても心強い思いを持った。

ここで付け加えなくてはならないのは、著者がこのような二足のわらじの研究生活に没頭するうえで大きな支えとなっているのが、フロイトの「科学的心理学草稿」だということである。フロイトはもともと神経学者として出発し、当初はこの道でも優れた研究者として期待されていたのだが、無意識の心的現象の魅力に惹かれ、以後精神分析の道に舵を切り、自身は「科学的心理学草稿」自体の公開を断念している。しかし、そこに描かれているフロイトの仮説が著者の目には自身の関心と重なり合うことから、二足のわらじの研究生活の大きな推進力となっていることが熱い思いで語られている。この情熱に評者は思わず拍手を送りたくなる。

さてここまでは、無意識の心的現象を「見える化」したいという著者の思いに共感を抱くのであるが、本書は最後に「精神分析の未来」と題した講演記録を新たな章として付け加えている。そもそも本書は『こ

ろの科学』に連載されたものだが、最後のこの章はそれとは異質な内容である、と私には映ってしまう。

本章は、現在の精神療法の世界において、精神分析がエヴィデンスの乏しい精神療法として「科学的に」評価されることがなくなり、エヴィデンスを明確に示した認知行動療法に取って代わられていることに対して、いかにしてこの窮地を脱するか、つまりは精神分析療法のエヴィデンスをいかに構築するか、それがテーマとなっている。

おそらく著者にとつては脳科学研究によって無意識の心的現象を「見える化」したいという思いの延長としてこの講演内容が付け加えられたのではないかと想像される。

しかし、精神分析療法の治療効果を「見える化」するために、多様な評価尺度を用いて数値化するという作業が果たして本来のエヴィデンスたりうるのであろうか。精神療法という〈患者・治療者〉関係に起きる事象それ自体を「見える化」するとはどういうことか。「主観」と見なされる心的事象を「客観」化(見える化)することが精神分析療

法のエヴィデンスとして多くの者を説得させる力を持ちうるのであろうか。

評者に言わせれば、われわれの思考に強い影響を及ぼしている「主観」客観」図式から脱することがなにより大切なことではないかと思うのである。つまりは、主観的事象の確かさをわれわれは数値化によって確かめうるのか、あるいはそれで納得しうるのかということである。これは近代哲学の根本問題である「主観と客観」ないし「認識と対象」と相通じる問題でもある。「認識は、認識する主観の認識である」「認識には、認識される客観が対立する」。

そうであれば「認識は、認識された客観と認識自身との一致を確かめうるか」。つまりは、ある対象を認識する際に、その対象そのもの(客観)と認識された対象(主観)が同じかどうかをどうすれば確かめうるかという問題である。主観(本人)によるその対象の認識が、対象そのものと同じかどうかを確かめるためには、確かめる主体が主観の外に出なくてはならないが、それは不可能である。「論理的に考える限り、人

間は原理的にその一致を確かめることはできない」ゆえ、〈主観・客観〉図式に孕まれた矛盾を解き明かさなければならぬ。これこそフツサル現象学の取り組んだ最大のテーマであった。

結論を急ぐが、人間はただ〈主観〉の「内側」だけから「正しさ」の根拠をつかみとっている。したがって、問題はその原理を〈主観〉の内側に内在させていることを明らかにする点にある。一般にわれわれが「客観」と称しているものの内実は、これが現実であることは「疑えない」と確信を持つことだからである。したがって、われわれにとつて主題として考えなくてはならないのは、そのような確信がどのように生じるのかという〈主観〉の中での確信の条件を突きつめることだといわなければならない(以上の内容については、以前本誌二〇号に掲載された竹田書嗣著『現象学入門』の私の書評を参照されたい)。

精神療法におけるエヴィデンスとは何か、を考えるためには、そもそも精神療法はどのような人間像を目標としているのか、患者の内面の心

の動きをどのようにして判断しているのか、さらには治療効果をどのようにして判断しているのか、深く検証する必要があるのではないか。この点については、他の機会に著者とぜひとも議論したいものである。

小林隆児

(こばやし・りゅうじ/感性教育臨床研究所)

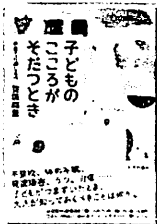
幼少期から思春期まで数千人の子どもに寄りそい続けてきた児童精神科医が、事例豊かにその本質をやさしく語りかける。

CONTENTS

- 1 したいのいたいのとんでゆけ
- 2 子どものものさし
- 3 しつけは大変である
- ▶コラム1 風穴をあける子どもたち
- 4 子どもが他者の視点に気づくとき
- 5 友だちをもつことと社交性の発達
- 6 こころの発達にともなう仲間関係の成熟
- 7 困った行動に隠された、子どもの「本当の気持ち」
- 8 中学生が不登校になったとき
- ▶コラム2 子どもの治療において関係性をどう結ぶか
- 9 “平均”ってなんだろう?
- 10 子どものSOSの受けとり方
- 11 子どもが“自分”になるための親離れ・子離れ
- ▶コラム3 親子のはじまり
- 12 非常事態の中で、子どもたちをいかに守るか
- 13 逆境を生きぬく子どもたち

好評発売中! 四六判/定価1,760円(税込)

不登校、体の不調、発達障害、うつ、自傷……子どもがつまずいたとき、大人が知っておくべきことは何か



子どものこころがそだつとき
子育ての道しるべ

◎ 日本野村病院院長 精神科医 笠原麻里

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4 TEL:03-3987-8621/FAX:03-3987-8590 <https://www.nippsy.co.jp/> 日本評論社